

<p>低魚粉飼料の有効性評価</p> <p style="text-align: right;">大浜秀規</p> <p>DDGS を用いて魚粉の配合を 22% まで落とした低魚粉飼料の有効性について評価を行った。低魚粉飼料は、飼料効率及び増肉係数が低下するため成長に時間がかかり、糞量が多くなるものの、肉質に大きな変化はなく、飼料単価が安いことから、飼育形態によっては有効な飼料と考えられた。</p>	<p>ブドウ搾り滓を利用した新ブランド魚の開発</p> <p style="text-align: right;">名倉 盾</p> <p>ブドウ搾り滓入り (1%, 5%), ポリフェノール入りの飼料を作成し、飼育試験を行った。ブドウ搾り滓入り (1%, 5%), ポリフェノール入りの飼料を対照区と比較したところ日間増重率, 飼料効率ともに対照区と有意差はなかった。試験尾数を増やし、脂肪酸やアミノ酸組成など味や栄養にかかわる部分についても研究を進める必要がある。</p>
<p>昆虫サナギによるニシキゴイ稚魚の飼育成績向上試験</p> <p style="text-align: right;">青柳敏裕・芦澤晃彦・坪井潤一</p> <p>ニシキゴイ稚魚の飼育成績向上を目的として、市販飼料に 5% 量の昆虫 (ハエまたはカイコ) サナギ製品を添加し、生残, 成長について検討した。1 次選別の結果から、昆虫サナギの添加によりニシキゴイの初期生残が向上するものと期待された。昆虫サナギの添加によりニシキゴイの白血球食能が賦活化されることが示され、初期生残向上に寄与している可能性が考えられた。</p>	<p>ワカサギの粗放的な種苗生産について (短報)</p> <p style="text-align: right;">高橋一孝</p> <p>H4 年度から H9 年度にかけ、ワカサギの粗放的な種苗生産について検討したところ、1 年後の取り上げ時の生残率は 0~11.2% (平均 3.7%), 平均体重は 1.3~9.8g であった。本方式で、概ね数千尾程度のワカサギ親魚を継代して確保することができた。</p>
<p>魚拓による大型アユ釣獲状況の検討</p> <p style="text-align: right;">大浜秀規</p> <p>富士川で釣られたアユの魚拓 1489 枚のうち全長 28cm 以上が 953 枚あった。過去 17 年間のうち、豊漁年が 7 回、不漁年が 6 回、平年が 4 回あった。4~5 月に豊水流量以上の日数が多いと大型アユの魚拓数が少なくなる関係が認められた。大型アユの豊不漁は天然アユのそ上状況のみでなく、濁り・水温などの生息環境や釣り人の影響を受けていると考えられた。大型アユの釣れる場所は偏在し、特定の人が数多くの大型アユを釣獲していると考えられた。</p>	<p>当所産アユの継代数の違いによる釣られやすさの比較 - II</p> <p style="text-align: right;">坪井潤一・芦澤晃彦・岡崎 巧</p> <p>当所で 1 世代 (F1 群) および 6 世代継代飼育 (F6 群) された駿河湾産養殖アユについて、同数を放流した河川で投網による捕獲を行った。投網による捕獲で F1 群が占めた比率は 37% であり、F6 群よりも有意に低かった。継代が少ないと養殖環境での奇形率が上昇し、河川での定着率が下がることが示唆された。</p>
<p>下曽根コロニーにおけるカワウの餌魚種選好性</p> <p style="text-align: right;">芦澤晃彦・坪井潤一</p> <p>下曽根コロニーのカワウの吐き戻しから、餌魚種選好性について調査を行った。カワウの IRI (餌重要度指数) はオイカワ, アユ, ウグイの順に高かった。一方、餌選択係数はウグイ, カマツカ, オイカワの順に高く、アユは 6 番目であった。よって、アユはカワウにとって重要な餌ではあるが、利用しやすい餌ではないことがわかった。</p>	<p>県内におけるヒメドジョウの生息状況</p> <p style="text-align: right;">大浜秀規・加地奈々・青柳敏裕</p> <p>北杜市にあるみどり湖周辺及びその下流域のヒメドジョウ生息状況を調査した。流入水路での生息域は 150m 以内であったが、下流 10km までの 3 カ所すべてでヒメドジョウが確認された。流入水路から下流 500m まではヒメドジョウが優占種であった。下流で確認されたヒメドジョウが繁殖している可能性も高いと考えられ、すでに生息域拡大を阻止することは困難と考えられた。</p>